

こけしの微笑みは、わたしの微笑み。

ふくしまでがんばるひと®

阿部家 下の松屋系 六代目

こけし工人 阿部 国敏さん

タカラモノニュース vol.13



湯けむりにほころぶ

こけしたちの可憐な瞳



福島駅から西へ、どかな道のりをバスに揺られること約四十分。どっしり鎮座する吾妻山が顔を見せ、「雪うさぎつてとて〜」「ほら、あそこ〜」などとおしゃべりしているうち、眼下に箱庭のような町並みが見えてくる。こけは、こけしで有名な土湯温泉。タイムスリップしたかのような昔ながらの風情に胸が踊る。入口で迎えてくれる三メートルの巨大こけしにベロりと挨拶を済ませ、温泉街を縫うように流れる荒川に沿ってテクテク歩く。会いに行くのは、こけし工人 阿部国敏さん。笑顔で「ど〜も〜」と迎えていただいた。

昭和四十七年生まれの阿部国敏工人は、土湯こけし系統のひとつ、阿部家下の松屋系の六代目。曾祖父の作り上げた『治助型』を継承している。平均年齢六十七才の土湯こけし工人の中では、一番の若手。二十一年やってますけど、ずっと期待の星って言われてるんです。はははは」と国敏さん。



こけしは、ままごとの道具だった？

はじめに基礎知識をひとつ。こけしの起りは江戸時代の終わり頃で、お盆やお椀づくりを生業とする『木地師』が、余った木材で女の子向けの人形を作ったのがきっかけなんだとか。国敏さん曰く「元々は、リカちゃん人形みたいなままごとの道具だったんです」とのこと。現在のように飾って眺めるのではなく、持って遊んだり服を着せたり、おまごとの道具として遊んでいたらしい。目を閉じ当時に想いを馳せてみると、色とりどりのこけしで楽しむ子供たちの姿が浮かんでくるようだ。

伝統こけしは東北生まれ

大切な基礎知識をもうひとつ。土湯こけしに代表される『伝統こけし』は、東北六県の温泉場に合計十一系統あり、中でも土湯、鳴子、遠刈田は「三大こけし発祥の地」として知られている。また、東北以外で作られるおかつば頭のもは、「創作こけし」として区別されているようだ。私たち地元人間にとつてこけしは、「一家に一体的な存在であり、幼い頃から見慣れているものだっただけに、伝統こけしが東北限定だったとは！」という驚きと同時に、「東北すこい！」と胸を張りたいような誇らしい気分も湧いてくる。

土湯こけしの特徴



こけしづくりは木こりから

こけしづくりは細かい手作業の連続。かと思いきや「木の伐採から始めるんですよ」と聞き、「ええー、そこからですか!？」と声を揃えた取材陣。木の中の水分が少なくなると十一月から二月の間に山に入って伐採し、乾燥させる小屋に運ぶのだが、これが骨の折れる力仕事。そして、皮をむいて半年から一年乾燥させたのち、円筒形に荒削りしてから「まじやく」で削り出しに削り出し出すのだそうだ。ひとつのこけしが出来るまで約二年。「削りだしたら数時間で完成なんですけど、段取り八分って言うくらいで、それまでが大変ですね」と国敏さん。

さらに驚くのは、道具もすべて手作りだということ。例えば木を削るノミは、鉄を焼いて叩いて作る。「こけしづくりの道具は売ってないですから」と聞けば、「なるほどー」と思うものの、ジャンル違いの作業をすべて一人で?と考えると気が遠くなってしまう。「これも修業のひとつ。こけしが作れるだけではダメなんです」。

こけし工人は、多才だ。

伝統の技術を守りたい!

国敏さんがこけしを作りはじめたのは十九才。少年時代からモノづくりの仕事に携わりたいと思っていたが、こけし工人になろうという考えはなかった。「あまりにも生活の一部すぎて、大事なものだとは思っていませんでしたね」。転機となったのは祖父の死。父である敏道さんも工人ではあつた

充実していた修業の日々

一通りの作業を覚えるには最低でも三年かかるというこけしづくり。しかし、修業をつらいつらいつらと感じたことはなかったという。師匠に付きつきりではなく、教えてもらったことを元に試行錯誤を重ねる日々で、「あれも出来るようになった、これも出来るよ

が土産物屋の経営が忙しく、こけし作りには手が回らない。伝統を守るべきかどうかの岐路に立たされた国敏さん。高校を卒業後一年じつくりと考え、「伝統を受け継いでゆこう」と決意する。

になったという嬉しさとか、喜びのほうが大きかったですね」と目を細める。

「とにかくひたすら回数をこなして自分で感覚を叩き込むこと」が上達の秘訣で「器用さよりも忍耐力ですね」と国敏さん。一番難しい作業は命を吹き込む顔の描彩で、先代のつくったものを参考に、切れた電球や卵など、曲面の素材を使いひたすら描いて練習した。

そうやって作り上げたこけしを先輩たちに見てもらい、「これなら土湯こけしとして世に出せる」と太鼓判を押してもらったそうだ。「伝統は、意気込みだけじゃなくて、そつうに厳しさがないと守れないんです」。



第三次こけしブーム 到来中

みなさんはご存じでしょうか。一九二〇年代ごろの第一次、一九六〇年代ごろの第二次に続き、第三次こけしブームが来ていることを。二〇一〇年頃から都会の若い女性を中心に広がっていて、その理由は「かわいい」「素朴」「愛らしい」などなど。現代向けにアレンジされたデザインも受けはいいが、「昔から受け継がれた伝統こけしに良さを見出しているみたいですね」。こけしの専門誌が発行されたり、愛情溢れるブログ記事が数多く発信されたり、『こけし女子』なんて言葉も生まれていることから、その人気ぶりが窺える。

では、男性は楽しめないかということ、そんなことはありません。じつと眺めていると、昔懐かしい甘酸っぱいような気持ちが浮かんで来るのです。これって……恋？

また、絵付け体験やろくろ挽き実演、即売会などのイベントも盛んで、国敏さんも頻繁にお呼ばれするそうだ。仕事と重なって忙しかったりもするが、「普段ひとりで籠もっている分、リフレッシュできるし、同業者やお客さんと話すチャンスもあるから楽しんでですね」と嬉しそうに笑う。「呼ばればどんどん行きますよ」。その言葉には、こけしに触れてもらい、すそ野を広げたいという強い思いが感じられる。それは勿論、こけし工人さん全員のもの思いでもある。



『ほほえみがえし』 笑顔をつなぐ

その思いは『新しい伝統こけし』を生み出すきっかけにもなった。それが国敏さん作『ほほえみがえし』である。斬新な円錐形の胴体と、自在に動く「こ」笑顔が特徴の可愛らしいこけしで、二〇〇九年には『つくしまものづくり大賞 特別賞』を受賞している。話が持ち上がったのは、『東北の美輪会』という各地域の工人さんの集まり。制作コンセプトは『もつとたくさんの人に受け入れてもらえるこけし』。ただし、全てが新しいわけではない。「伝統こけしに興味を持っていただく入口となつてほしい」との思いから、胴体のろくろ模様や前髪とビン間の力セという赤い模様など、土湯こけしの特徴は残している。伝統を踏まえた新しい挑戦だ。おかげで、愛好家以外の方にも好評を博す人気商品となった。

これから やってみよう

ちなみに『ほほえみがえし』という名前はお母様がつけたとのこと。「私は作るの一邊倒で、名前はなんでも良かったんです」と苦笑いの国敏さん。お客様が「これ見ると笑顔になるね」と言ったのを聞いてひらめいたという。なんとナイスなネーミング。微笑みの輪がどんどんつながり、土湯じゆうに笑顔の泉が湧き出すようだ。



こけしを作り続けて二十一年。これからやってみようとは？と尋ねると、ひとつひとつ言葉を選ぶように語ってくれた。「いいこけしが出来た！と思つても、時間が経つと、あすれば良かったことすれば良かったと思つて思つて思つて。百点が百点じゃなくなるというか。だから、最高のものはあるかもしれないけど見つからないかもしれない。でもそれが、次のこけし

オリジナルの
土湯こけしが楽しめる
「こけしの絵付け体験」
もできます。



こけし工房

(おみやげ まつや 内)

〒960-2157
福島市土湯温泉町字下ノ町25
Tel 024-595-2156



につながると思っています。そうやっていずれば、自分だけの『国敏型』を作っていきたいですね」。

伝統を守ることは、挑戦を続けることである。

国敏工人の言葉の端々から、そんな気概が伝わってくる。そしてその思いは、こけしファンのおすそ野を広げ、ひいては土湯の賑わいを取り戻すことにもつながっているのだろう。色とりどりのこけしの模様と、土湯の未来を重ね合わせるようにして国敏工人は今日も、ろくろ模様を描き続けている。



タカラモノニュースは、お客様の「楽しい、ウレシイ」に役立つ情報提供を目指して、年4回発行しております。
ご意見ご要望など、なんでもお気軽にお寄せください。

2014年6月発行



発想から発送までお客様のニーズにお応えします。

タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9

TEL.024-526-4303 FAX.024-526-4302

E-mail sky@inaka.co.jp http://www.takara.inaka.co.jp/



RB-ISO

RB-Q04008

適用範囲:印刷・製本・社会調査